

BATTLE BALLER

HARUKA

I - 6

事情

Ψ

バトルボーラーはるか

第一集

バトルボール(神気珠玉)

第6章

事情

作・ Ψ (**Eternity Flame**)

八万町(はちまんちょう)の夜空に、野太い柱状の赤き光が立ち昇った。

「帰ってきたか、はるかよ。」

「はい、師匠。沙織は？」

「うむ、まだ大丈夫じゃ。それより外を見てみよ。」

光を確認したチャン・リンシャンが、駆けつけてくるのが上空に確認できた。

「あ奴は“雷帝”と呼ばれ、アジア全域にその名を轟(とどろ)かす女傑(じょけつ)じゃ。心してかかるのじゃぞ！」

「分かったわ。」

「はるか、自分を信じて正しい道をゆけ。」

「はい、お兄ちゃん。」

チャイムでも鳴らすかのように、挨拶がわりの雷が鮎吉宅の玄関前に打ち落とされた。

「ふふふ...待ってたわよ。おとなしく私の軍門に降ってくれる気になったかしら？」

「誰がッ！」

「そう...なら仕方ないわね。始めましょうか？」

「待って、ここじゃ周りの人に迷惑をかけるわ。場所を換えましょう。」

そう言って、はるかはリンシャンを小松島の日の峰公園に誘導してきた。

「いつまで飛んでく気？」

「ここよ。」

海と山に囲まれた自然の要塞(ようさい)のような地形。テニスコートや山々の丘陵(きゅうりょう)を利用した遊具が沢山ある場所も夜間は人出がなく、絶海(ぜっかい)の孤島(ことう)のようであった。

「ライトニングクロウ(雷帝鉤)!!」

「ちょっと待って！」

「今さら怖気づいたのかしら？」

「違うわ。体術の勝負をしない？」

「体術？」

「追っかけっこよ。あなたがオニで私を捕まえたら勝ち。」

「あなたと遊んでる暇はないわ！」

「あなたが私を捕らえられたら、私はあなたの言う事に何でも従うわ。それでどう？」

武功(ぶこう)を競いあい傷つけてしまった場合、回復させる手間を考えればそっちが手っ取り早い。初めから戦いに勝つ事しか考えていないリンシャンは、そう算盤(そろばん)をはじき、はるかの条件を呑んだ。

「いいわよッ！！」

その言葉を口火にして、いきなりリンシャンがはるかを捕まえようと飛びかかってきた。戦いに卑怯(ひきょう)な手という物はないが、かなり身勝手な展開の合図。意表を突かれたはるかが驚いた顔をしたッ。

「捕えたッ！！」

目前に迫ったはるかに、勝利を確信したリンシャンがそう言って笑みをこぼした。あと拳一つ分も手が伸びれば勝利が手中に入る、しかしその瞬間...

「何いッ！！？」

はるかが一瞬にして消えたーッ。

「こっちよ。」

麓(ふもと)の付近にいたはるかは、目にも止まらぬ速さで、一段丘陵(きゅうりょう)を上った先の恐竜遊具の広場へと駆け上っていた。

「いつの間にッ!？」

「たった今よ。」

「そんな馬鹿な...！！？」

あまりにももの動きの速さに、事態が呑み込めないリンシャン。

「そうか！！幻術を使ったのねッ。」

「違うわ。あなたよりも私の方が足が速いだけよ。」

「私よりもあなたの軽功(けいこう)が勝る...!? そんな...嘘よッ!!」

リンシャンは再びはるかの後を追った。すると、高さ数メートルはあろうかという肉食恐竜のオブジェに向かう。リンシャンもすぐに続いたのだが、プラスチック製のそのオブジェは、表面がツルツルになっていて足場が悪く、スリップしてしまった。

「オニさん、こーちら!!」

それに対し、軽々と駆け上ったはるかが挑発をした。

「くッ...」

リンシャンは必至の形相(ぎょうそう)で、麗(うるわ)しき美女の面影はすっかり消え失す程に追い回したのだが...

「何故、追いつけない...??？」

そう言って困惑の表情を浮かべた。

「簡単な話よ。あなたの軽功よりも私の軽功が勝っている、ただそれだけの事よ。」

「ば、馬鹿な...!? この数日で、一体あなたはどんな修業をしたの？」

「話しきれない程、色んな修業をしたわ。もう終わりにしましょ。」

「どういう事!？」

「あなたの軽功じゃ私を捕らえられない。軽功で劣(おと)るという事がどういう意味を持つか知ってるでしょ? 負けを認めて沙織と正友を元に戻して!!」

軽功で劣るという事は、即ち内力の差を表していた。少々の差であればどうにかなるであろうが、二人の間には歴然たる差がある。それは数日前のはるかがそうであったように、今のリンシャンでは、はるかに太刀打(たちう)ち出来ないという事を物語っていた。

「...認めないわ。」

「えっ...?」

「私は負けられないの。」

リンシャンは悲壮(ひそう)なる覚悟を持って、はるかに交戦の意志を伝えた。静かな声でうつむきがちにそう答える姿に、ただならぬ気迫を感じたはるか。と同時に、はるかは疑問を感じていた。

「あなたの本当の目的は何なの？」

「あなたには関係なくってよ。」

「私、あなたとは闘いたくないわ。」

「何？」

「だってあなた悪い人じゃないもん。」

「な、何を急に...!？」

「悪い人はそんな悲しそうな瞳をしないわ。」

「...。」

いきさつまでは分からないが、リンシャンの心の奥に潜む何かを敏感に察知したはるか。リンシャンは心を見透かされ、黙りこんでしまった。

「ねえ...何か理由があって私と闘ってるんでしょ？私に協力できる事なら力になるから...だからもうやめましょ。」

「黙れッ！！」

沈黙するリンシャンを見て、相談役になろうとしたはるかだが。その同情的とも見える態度が、プライドの高いリンシャンの怒りを逆に買ってしまった。

「雷帝鉤(ライトニングクロウ)！！」

「待ってッ！」

「問答無用(もんどうむよう)よッ！！」

躰(かわ)しきれなくなったはるかがたまらず武器を出した。

「くッ...フレアクロス(焰旋棍)！！」

ガシャーン...

「ふっ...それでいいわ。本気で行くわよ！」

リンシャンは焦っていた。それは体術と軽功で自分が劣るという事が、どういう結果を招くか熟知(じゆくち)していたからである。かといって、リンシャンには退く事を考えなかった。いや、退けない理由があった。精神的に追い込まれた状況で、何とかしようと苦しみながらも、進むしか選択肢のない彼女にとって、唯一残された道。それが戦う事であった。

他に道は無いとはいえ、それは無謀(むぼう)な賭けであった。頭によぎる敗北の二文字。自分が負けるのが恐いのではなく、自分が負ける事によって大切な物を失うという現実が恐ろしかった。

心の消耗は体に大変な負荷をかけていたが、そんな事はおくびにも出さず、リンシヤンの攻撃は、前回をはるかとは戦った時以上に冴えわたり苛烈(かれつ)を極めたッ。

「さすが裏武林48門のトップね...」

「死ねッ！！」

恐竜の広場から始まった打ちあいは、隣の山にあるインディアンの広場まで続いていた。リンシヤンの絶え間ない連撃を巧(たく)みにいなすはるか。トーテムポール郡の間を揉(も)み合いながらジグザグに行き過ぎ、岩山を模(も)した遊具に登ると、はるかは一計(いつけい)を案じワザと隙(すき)を作り出した。

それに気づかずに踏み込んできたリンシヤン。いきなり無重力状態に自分の半身が陥(おちい)った事に体勢を崩し、立て直そうとして無防備となった背後に痛烈(つうれつ)な一撃をくらってしまったッ！！

「キャアアアア...!!!」

岩山の東側はフリーフォールという急勾配(きゅうこうばい)の滑り台になっていて、はるかは岩肌のなくなってる部分で羽を出し、宙に浮いた状態で落とし穴を作って待ち構えていたのである。

そうとは知らず踏み込んだリンシヤンは、痛打を浴びた上に頂上から滑り落ちてしまっていたッ。

「うう...うううう。」

足をガクガク奮わせながら、なんとか立ち上がったリンシヤンだが、唇から血を流していて、相当なダメージを被(こうむ)っているのがひと目で確認できた。

「ハアハア...」

「もう無益な戦いはやめにしよっ!？」

「...。」

「あなたが戦うワケを教えて。あなた一人では解決できないかも知れないけど、皆で力を合わせればきっとなんとかなるわ。あなたは何か困っているんでしょ？私にその悩みを...」

「うるさいッ、恩着せがましいわよあなた。こんな奇策に成功したからって、私に勝ったつもり？ここからが本番よッ！！」

はるかの出した助け舟。その言い分を最後まで聞こうともせず、呼吸を整えたリンシャンが再び牙をむいたッ。

「金剛輪刀(ヴァジュラ)！！」

「くっ...！！」

ドゴオオーン・・・

羽を出して飛び上がったリンシャンが、チャクラムを立て続けに投げつけた。それを躲(かわ)そうとしてはるかも空へと駆け上がった。すると、いつの間にかはるかの周りを、遠まきに数多のヴァジュラが取り囲んでいた。

「無限流動放電陣(ライトニングディメンション)！！」

はるかを包囲するヴァジュラに向け、リンシャンが新たに幾つかヴァジュラを投げ込むと、ピンボールのように弾き合い予測不能の全方位攻撃が始まった一ツ。

「ファイアービュート[火焰鞭]！！」

はるかは鞭で迎撃(げいげき)し始めたッ。

「フフフ...この前のサンダースピンドルとはケタが違うわよ。そんなモノで防げるかしら？」

弾き合うヴァジュラ。はるかがいくら鞭(むち)で振り払っても、包囲網(ほういもう)を形成するヴァジュラ同士が、またまたそれを弾き返すというループが続く。しかも、それらは弾き合えば合うほどにスピードを増していったッ。

「フフフ。いつまで持つかしら？」

そう言って余裕の表情で静観(せいかん)していたリンシャンだが。次の瞬間、それは全く逆の表情となっていたッ。

「フェニックススターダストエクスプロージョン(不死鳥流星拳)！！」

人中極咲疏心剣法(じんちゅうきょくしょうそしんけんぼう)を修得したはるかは、以前よりも動きが滑(なめ)らかになっていて、同じ技を繰り返しても動きに無駄がなく、リンシャンの攻撃を物ともせず、限界に達したヴァジュラが摩耗(まもう)に絶えきれず、砕け散った一ツ！！

「何ィー一ツ！？」

リンシャンのスピリットアームズが、限界にまで達する程の摩耗(まもう)を与えたはるかの動きは、その死角なき激しさの回転運動ゆえに、おびただしき熱の流れが光となりリンシャンの目を眩ませた一ツ！！

「ガトリングブラスト(爆炎連弾撃)！！」

フレアクロスでの第一波を省き、素早さを重視したはるかの変則攻撃(へんそくこうげき)。リンシャンをメッタ打ちにした鞭(むち)が、さらに首と両足を締め上げ自由を奪うと、ガラ空きの腹部に強烈な蹴りが見舞われた一ツ！！

トーテムポール郡を薙(な)ぎ倒しながら吹き飛ばされるリンシャン。それでも勢いは止まらず、ショートバウンドしながら麓(ふもと)まで落石のように転げ落ちて行った一ツ！！

「うっ！？...ぐはッ...」

血ヘドを吐き低い声で悶(もだ)えるリンシャン。見かねたはるかがそこへ駆けつけると、なおもまたリンシャンは立ち上がり戦う姿勢を見せた。

「もう...やめましょ...お願い！！」

追い詰めている筈のはるかが、悲鳴をあげるかのようにそう言った。

「ハアハア...私に勝つのなら...殺しなさい...」

額からも血を流しながらも、そう言って凄(すご)むリンシャンに、はるかが恐怖を感じ足を震わせ出した。リンシャンの気迫に圧された訳ではなく、これ以上の戦いは生死にかかわると思うと、恐ろしくなっていたのである。

「天弓、世那剋理武(セナケリブ)！！」

「...」

「構えなさいッ！！」

うつむいたままのはるか。その右頬を閃光(せんこう)が駆け抜け、浅くではあったが傷を負った。

「くッ...」

「次は外さないわよッ！！」

「やっぱり...。」

「何？」

「あなたは悪い人じゃないんだわ。悪い人なら、さっきの矢をワザと外したりしないもん。だから...もう争う事はやめましょ？」

「ふざけないでッ！！無防備なあなたを倒したとなれば私の名誉に傷がつく。ただそれだけよッ！次は外さない！！」

あくまでも自分のプライドだと言い張り、譲らないリンシャン。それは口先だけで本心ではないのは、はるかは分かっていたが、「次は当てる」という台詞は、紛れもない本気であるという事は明白であり、対抗手段を取らざるを得なかった。

「メテオカリバー！！」

「フッ...それがあなたのスピリットアーム第三形態ね...どちらが優れているかここからが勝負よッ。」

そう啖呵(たんか)を切ったリンシャンだが、はるかの火聖剣を目の当りにし、冷や汗をかいていた。

「雷帝の怒りよ。我に敵する者を打ちすえよッ！！」

リンシャンの戦う理由。それは富や権力とは無縁の物であった。

リンシャンがまだ雷帝門の一門弟(いちもんてい)だった頃の事。当時の彼女は、上層部からの命令で、政府当局に二重スパイとして潜入していた。目的は裏社会を掃討(そうとう)しようとして動いている、当局の構成員の動きを調べて報告し、有事の際には内外から攻めて殲滅(せんめつ)するという任務。

リンシャンは、雷帝門が資金源としている遊郭(ゆうかく)があるという架空の情報を当局に密かに流し、そこには雷帝門幹部の娘が踊り子として働いているという、おまけも付けてその役を演じていた。そこにまんまとやって来た当局の役人。名はリンチェイと言った。

初めは馬鹿な奴だと心の中で蔑(さげす)んでいたのだが、逆情報を信じ込ませる為とはいえ、同門の仲間に自分を襲わせたり、はたまた色仕掛けなど、様々な演出をしている内。リンチェイの実直さと誠実さに、罠(わな)にはめてるはずの彼女自身が、恋の罠に落ちてしまっていた。

許されぬ恋。組織は裏切れないと、一旦は殺そうともしたが、非情になれず義理と人情の間に苦しんだ挙句。彼女は生まれて初めて任務を放棄し、彼の元から立ち去った。がしかし、その決断が思わぬ事態を巻き起こす事となった。

彼もまたリンシャンに好意を寄せてしまっていて、失踪した後を追ってきたのである。二人は敢(あ)えなく雷帝門の一党に捕まり、リンシャンは罪を問われなかったが、リンチェイは処刑されそうになった。

自分を思い捕われの身になった彼を、何とか助けようと必至に命乞いをし、恩赦(おんしゃ)にまで持ち込ませたが、今度はそれを知ったリンシャンの許嫁(いいなずけ)であった男が憤慨(ふんがい)し、リンチェイを殺そうとした。

それは無罪放免となったリンシャンとリンチェイが、駆け落ちしようとしたからで、あと数里も行けば雷帝門のシマから抜け出せるという所で、男達の決闘となってしまった。

二人の腕は互角で、双方ボロボロとなり、リンシャンは泣きながら闘いをヤメるように頼み、その声にリンチェイが後ろを向いた瞬間、悲劇が訪れた。リンシャンの許嫁(いいなずけ)が不意を突き、暗器をリンチェイに向かって投げつけた。リンシャンは庇(かば)おうとして割り込み、自らを盾にして暗器を自分の身に受けた。暗器は胸に突き刺さり、常人なら完全に死んでしまう状態であった。

絶叫する男の声がした。薄れゆく意識の中、認識できなかつた愛する男の言葉。奇跡的に命を取り留めたリンシャンだが。リンチェイは、気づいた時には還(かえ)らぬ人となったと告げられた。

暗器を投げるという、卑劣(ひれつ)な真似をした嫁許(いいなずけ)を問い詰めると、失望した男はショックのあまり、リンシャンの傍(かた)わらに寄り添うようにして絶命したという。

愛する男の名のみが残された墓石。そこへ案内されると、その墓石を抱き締めたまま、気丈なリンシャンが誰の目も憚(はばか)る事なく号泣した。

それから月日の経ったある日。一つの吉報とも言うべき伝説が、雷帝門の首領となったリンシャンの耳にもたらされた。

亡き男と過ごした日々を忘れられないリンシャン。彼女が耳にした吉報とは、ソロモン王の秘宝の事であった。伝承や解釈の少し違った異説ではあったが、秘宝を手に入ればどんな願いでも叶うという内容は同じであった。「愛しい人にまた会える」そんな喜びがリンシャンの心を突き抜けた。その思いがリンシャンを狂わせた。

命を顧(かえり)みないほどに愛し合った二人。その傍(かたわ)れを亡くしたショックがどれ程かは、彼女を待たない私には計り知れないが、もし家族なり、友人なり、愛する人が生き返るとしたらどうであろうか。リンシャンと男の過去からも推(お)し量るに、彼女の立場からすればどんな事をしようが、どんなに手を尽くそうが頑張れる力を与えてくれるだろうし、その努力に見合う価値があると考え事であろう。

そして、その目的を達する為には、どんな困難な道であっても引き退がれないであろう。私の意識は再び目覚め出し、やる事は荒っぽいが、心の中は健気(けなげ)なリンシャンを応援したい気持ちさえも沸いてきだしていた。

「太極の火光(かぎろい)よ！敵を焼き尽くせ！！」

感傷に浸っている私を他所に、二人の壮絶な戦いが終盤に差しかかろうとしている。

「霸王恐慌雷光連弓弾(キングファイアーライトニング)！！」

一度に放たれた三本の矢。発射されて間もなく、その三本の矢が凄まじき勢いで疾走(しっそう)しながら、無数の矢じりとなって拡散(かくさん)した一ツ！！

「メテオドライブ[煌流星炎破]！！」

数えきれない程に拡散した矢じりだが、そのことごこくをはるかの技が粉碎したッ。

「何ッ！？」

激しき爆風に晒(さら)され体勢を崩したリンシャン。続けざまに、メテオドライブの小隕石がごときつぶてが体に幾つか被弾し動きが止まった。その隙に、はるかは一気にリンシャンに詰め寄ったッ！！

「三日月炎斬(クレセントレヴァーティン)!!」

はるかの攻撃に気づいたリンシャンは、とっさに弓で剣撃を防ごうとしたが、弓本体が砕け散り、リンシャンの肩口を刀の切っ先がかすめると、彼女は爆炎に包まれた一ツ。

「あああああ...」

そのまま大地へと墜落していったリンシャン。体を保護する自らのオーラに致命傷は免れたが、相当こたえた様子であったツ。

「ハアハアハア...くはッ!？」

立ち上がろうとしたが、リンシャンは吐血(とけつ)して倒れこんでしまった。

「大丈夫!？」

「くっ...自分の心配をしたら?」

「えっ???」

完全に優位に立っている筈のはるかであったが、リンシャンのその言葉に困惑していると、突然体のバランスを崩した。

「キャッ!？」

リンシャンが立ち上がり、すかさずはるかに蹴りを浴びせたツ。

「哈一ッ!!」

バキッ

「キャアアア...!!!」

はるかは躲そうとしたが、間に合わず吹っ飛ばされたツ。

「ううう...!」

「...さあ立ちなさい。戦いが内力だけじゃ決まらない事を教えてあげるわ!!」

「うう...こ、これは!？」

「雷帝傀儡光(マリオネットフォース)。私があなたの攻撃をただ受けてるだけだと思って?胸元を見てごらんなさい。」

「こ、これは...?」

はるかの点穴(てんけつ)に、針のような物が刺さっていて触ると電気が走った。

「痛ッ...これは!？」

「あなたと戦ってる間に私が仕込んだ内力(メキド)の暗器よ。あなたの自由は奪ったわッ。」
そこからリンシヤンの怒濤(どとう)の反撃が始まった。動きを封じられたはるかは防御できず、まともにリンシヤンの素手での打撃を喰らい続けた挙句(あげく)、投げ飛ばされたッ。

「くはッ...!」

はるかも頭から血を流し、口からも吐血したッ。

「この戦い、もらったわッ!!」

息を吹き返したリンシヤンが、再び天弓(てんきゆう)を編み出し大攻勢に出ようとしたッ。

「燃えろッ、炎よッ!!」

「無駄よッ!あなたの動きは封じたと言った筈。」

リンシヤンは詳しくは語らなかったが、マリオネットフォースの仕組みは、言葉通り術者が相手の体を直接操る技で、術者の暗器には細い糸が伸び、相手に刺さった暗器にまで繋がっている。それを解くには、術者の電力を超える力を逆電流として流し、経路をショートさせねばならなかった。

直感的にそれを感じとったはるかは、単に炎を出そうとしてたのではなく、その電力を作り出そうとした。

「うああああー!!」

「本当にやる気?無駄よッ。内力(メキド)のコンバートがそんな容易にできると思って?これで終わりよッ。」

はるかの意図を悟ったリンシヤンが、余裕な感じでそう言ったのだが—

「フェニックスセントエルモスファイアーッ[不死鳥聖雷炎]!!」

「何ィッ!?きやああああ...!!」

はるかは膨大(ぼうだい)な炎で空気を乾燥させて強力な静電気を発生させ、自分に浴びせる事によってリンシヤンもろとも感電させたッ!!

「と、解けたッ!」

「くッ、まさかこんな手が...!？」

「もうやめましょ。これ以上戦えば...」

満身創痍(まんしんそうい)のはるかとしんしゃん。お互いに動きも鈍り、体力も限界に近かったが、それに反して高まる内力のボルテージ。次に繰り出す大技が雌雄(しゆう)を決する。その果てには、どちらかがヘタをすれば死ぬ程の激しい戦いであったので、はるかはそう言ったのだ。

次にしんしゃんが技を出せば、はるかも手加減するほどの余裕は持ち合わせていないッ。

「まさかあなたがこれ程の底力を持つてるなんてね...これでケリをつけましょう。」

しんしゃんが雷を球体に集約し始めたッ。

「どうしてッ!？」

はるかの問いかけに耳をかさず、しんしゃんが神気殊玉(バトルボール)と呼ばれる雷の玉を顕現(けんげん)させた一ツ。空模様が一変し、雷光が夜空にほとぼしるッ。

「王土消失雷帝爆(キングダムロスト)!!」

もはや話しあう猶予(ゆうよ)はなく、はるかは険しい目つきをすると技を繰り出し応戦した。

「くッ...スーパーライジングエンパイアフェニックスショット(不死鳥飛翔皇弾)!!」

炎と雷のボールは激しくぶつかり合い、その衝撃が暴風を呼び起こし、日の峰(みね)の連山丸ごとを飲み込み。木々が薙(な)ぎ倒され、飛び散った火の粉と火花がさらにそれらを焼き払った一ツ!!

「私の雷光弾が押されている...ば、馬鹿なッ!？」

内力が劣るという現実を、幻術やまやかしではないかと疑っていたリンシャンだが、ここに至り、言葉じりはまだ懐疑的(かいぎてき)であっても、その現実を受け入れざるを得なかったようで。驚きの表情から一変して、静かに瞳を閉じると覚悟を決めた様子。両膝は地に着き、もう逃げる力はなく、敗北と共に自分の命も尽きるだろうという現実をもって、この戦いに幕を引くと悟った上での事であった。

その表情に無念さは欠片もなく、むしろ重荷から開放された安堵感(あんどかん)さえ滲(にじ)ませていた。その瞬間—はるかとは言えば、リンシャン程は肉体に深刻なダメージを受けてはいなかったが、片膝を地に着いたまま放心していた。

(これは...!?)

死を意識したリンシャン。その心の内にある想いが、はるかにも伝わり、一瞬、戸惑わせていたのである。だが、全てを瞬時にして理解したはるかは、戦いの最中である事を思い、我に返ってリンシャンを見据えたのだが、時すでに遅く。

瞳を閉じ覚悟を決めたリンシャンが、頭を垂れたまま、はるかのボールに呑み込まれる映像が、はるかの視界に飛び込んできたッ。

「誰か止めてえーッ!!」

「...なぜ助けたの...？」

死にそこなったという面持ちで、悔しそうにリンシャンがそう口を開いた。

「あなたいい人なんだもの。」

「私はあなたの仲間を殺そうとしたのよ...それがいい人だとでも言うの...？」

「私に勝って愛する人を救う為にでしょ？」

「なぜ...それを...？」

「わたしにも分からない...ただ、あなたの気持ちは分からなくはないわ。」

「なら、どうして私を死なせてくれなかったの...？」

「あなたの愛した人が悲しむから...。」

「な、何を言ってるの？」

「あなたの愛した人は、あなたに死んで欲しくなかったのよ。彼がなぜ死んだのか？それは自分のせいであなたが死んだと誤解したから...その人が亡くなった後をあなたが追えば、あなたは満足だろうけど、あなたの愛した人は自分のせいであなたが死んだと知れば、天国ですごく悲しむんじゃないのかな。」

「...。」

「あなたに幸せになって欲しいと、亡くなった彼はきっと思ってる筈よ。だからあなたが彼の事を思うなら、彼の分まで頑張って幸せになるべきなんじゃないかなって思ったの...ゴメンなさい。偉そうな事を言っちゃって...」

リンシャンは、はるかの話に黙って最後まで聞き、遠い目していたピントをはるかに向け、こう言った。

「あなたの言うとおりにね...私の願いは終えたと思っていたけど、そうじゃなかった。これからは、彼の分まで幸せになる事を考えるわ...私の負けよ。」

“亡き彼の思いを叶える為に生きる”というリンシャンの瞳は澄んでいて、本来の自分を取り戻したようだった。それを見て、秀樹がリンシャンに語り出した。

「そうだよ、リンシャンさん。ソロモン王の秘宝には、どんな力があるのか俺は見た事はないけど、そこにはひどいリスクがあると言われている。亡くなった彼も、自分の為にあなたの手を汚すような真似はして欲しくないだろうし、なにより生命なんてのは、一つしかなくて短い物だから尊いんじゃないのかなって俺は思う。亡くなった彼が、その大事な命の最後に遺(のこ)した言葉。その思いを胸に、明るく生きて行って下さい。」

リンシャンは瞳を潤ませながら疲労困憊(ひろうこんぱい)してたのが、急に緊張の糸が切れた事により気を失ってしまっていた。

むやみに扱えば“災い”をもたらすと伝えられるソロモン王の秘宝。一つしかない命をよみがえらせるという、神をも恐れぬ暴拳(ぼうきょ)に用いられれば、どんな災いが起こった事であろうか。リンシャンとはるかの会話で、大体の内容を把握した秀樹は、未錬を立ち切らせるように、やんわりと励ます形でリンシャンの心情に配慮(はいりよ)し語り口どおした。

「はるか、戦いは終わった。帰るぞ！」

「うん。」

二人は意気揚々(いきようよう)と引き揚げて行った。

バトルボーラーはるか
第一集 バトルボール(神気珠玉)
第6章・事情

<http://p.booklog.jp/book/57402>

著者：Ψ (Eternity Flame) 英 樹 (はなぶさ いつき)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>

ブログ：<http://profile.ameba.jp/jjmmd123/>

編集：Ψ (Eternity Flame) 秋乃空 (あきのそら)

ブログ：<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントもしくは秋乃空のブログへお願いします

<http://p.booklog.jp/book/57402>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57402>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ